

西ヨーロッパ旧石器における彫刻器の型式学的分析

早 川 正 一

I 目 的

II 諸研究の検討

Burkitt による彫刻器の分類

Ronen による彫刻器の分類

Narr による彫刻器の型式図示

Bordes ならびに Leroi-Gourhan による彫刻器の型式概念

Sonneville-Bordes による彫刻器の型式表示

Pradel による彫刻器の分類

III 分析と総括

形態別型式の総括

機能別型式の総括

製作素材の総括

特殊型式の総括

I 目 的

旧石器文化の研究においてヨーロッパの先史学はその調査資料の豊富さ、その学史的な先進性、その伝統的に優れた業績などを通してつねに世界の指導的な地位にある。一方、岩宿での旧石器の発見以来、四半世紀にもおよぶ今日、日本の先土器文化研究も目ざましい幾多の成果をあげ、独自の進歩を着実に続けている。こうした研究の発展の中にあつてフランス旧石器の先進的な知識は昭和の初期の大山 柏による紹介^①以来、多くの諸先学によって日本の旧石器研究の基礎として、あるいは活用するために導入され、少からず影響を与えてきた。しかしながらその個別的な詳細にわたる部分については十分な研究と理解がなされているとはいいいがたい。こうした問題のひとつに旧石器の型式学があり、ことに彫刻器 (burin, graver, Stichel) の研究に関しては芹沢長介によって1921年に Burkitt がまとめた彫刻器の分類の掲載^②と角田文衛によるフランス旧石器の彫刻器についての概説^③がなされているにすぎない。そこで西ヨーロッパにおける彫刻器の諸研究に基づいてその多様な型式学的分類と製作過程の技術論を中心に検討と分析を試みて、日本の先土器文化における彫刻器の正統な把握のためにささやかな一炬を献ずることがこの小論の目指すところである。

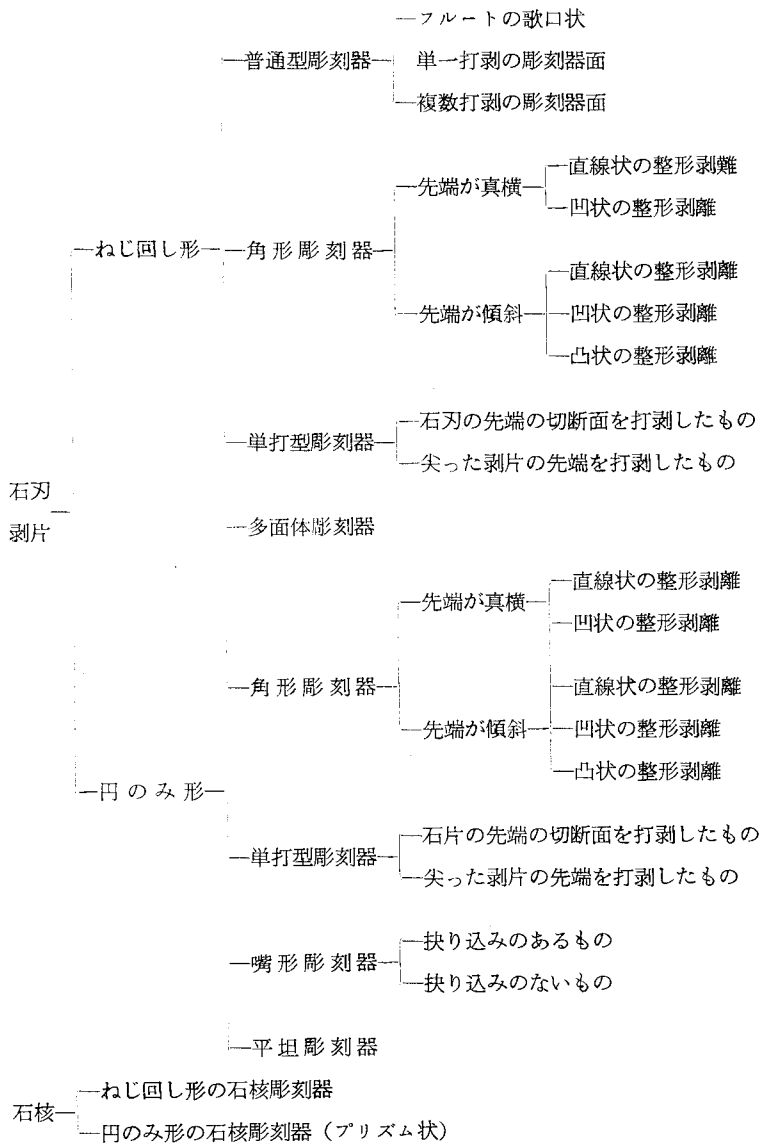
II 諸研究の検討

Burkitt による彫刻器の分類

彫刻器に関する言及や論述においてこれほど幾多の研究者に引用される分類は稀である。

M. Burkitt が今世紀初頭のイギリスを代表するすぐれた先史学者の一人であることもさることながら、形態上、多種類に分割されているにもかかわらず、系統的にかつ簡潔に分類されていることがその由縁であろう。

1921年に著した“Prehistory”の中で、彼は種々の彫刻器についての解説と分類表を最初に明らかにした^④ (第1図)。まず、彫刻器の刃先の形態によって、二つに大別している。一方は、相



第1図 Burkitt の彫刻器分類表

対する二つの彫刻器面^⑤ (graver facet) が先端において接合し形成される稜線が真直ぐなものと、他方は、その稜線が弧状に突き出すものである。ちょうど、我国の木工具にある「平のみ」の刃先のように直線状の例が前者であり、「円のみ」のように弧線を描く例が後者である。

Barkitt は、この両者に対して「ねじ回し形 (the screw-driver type)」と「円のみ形 (the gouge type)」という具体的な名称をあてはめ、のちに著書 “The old stone age” の中で彫刻器の製作には石刃や剥片を素材にするほかに、石核も供されるという追補と若干の修正を行っている以外は基本的に一貫した見解を保持している^⑥。「ねじ回し形」には、ヨーロッパにおいて最も普遍的なフルートの歌口を思わせる普通型彫刻器^⑦ (ordinary graver), 一端を真横あるいは、斜めに整形剥離^⑧ (trimming) したのち、側縁に沿って彫刻器面を刻みこんだ角形彫刻器^⑨ (angle graver), 切断面や突端を見つけて唯一の彫刻器面を打ち降した単打型彫刻器^⑩ (single blow graver) の3種類をあげている。「円のみ形」には、角形彫刻器と単打型彫刻器の他に一侧に彫刻器面を並列させた多面体彫刻器^⑪ (polyhedric graver), 船首のように突出した嘴形彫刻器^⑫ (beaked graver), 彫刻器面が他の彫刻器面と違って、石刃表裏の剥離面に施された平坦彫刻器^⑬ (flat(plane) graver) の5種類をあげている。また、石核を用いたものにも上記同様二つの型の存在を付け加えている。

このように基本的に彫刻器の刃先の形態によって大きく二つに分割する方法は、Burkitt が最初ではない。1911年、M. Boulon が行った開拓的な彫刻器の研究の中で、彼は既に「真直な刃先 (le biseau rectiligne)」と「円い刃先 (le biseau polygonal)」とに大別しており^⑭, Burkitt の分類はこの影響のもとに組み立てられたと思われる。彫刻器の側面からの観察による刃先の形態区分を基幹として更に、製作技術の相違から平面観察によって識別できる基本的な彫刻器の類型を表示したことは現在においてもなお高く評価できるものであろう。

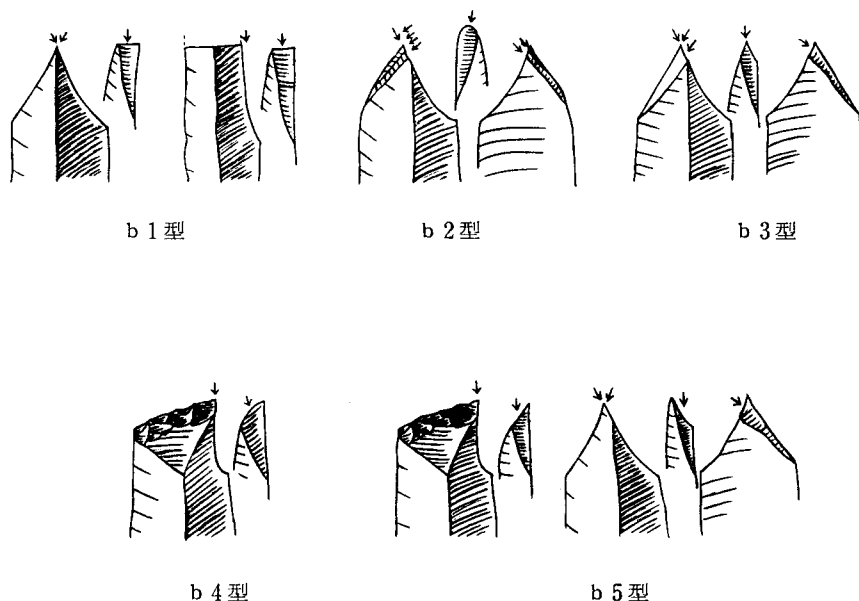
Ronen による彫刻器の分類

A. Ronen は1965年に発表した論文 “Observations sur l'Aurignacien” の中で *Formes des biseaux des burins* と題する一項をもうけ、オーリニヤック期における彫刻器の刃先の形態に着目してそれを5種類に区分した^⑮(第2図)。それらは石刃の長軸に対して先端の

- (1) 刃先が真横に直線上のもの (Type b1 : biseau transversal rectiligne)
- (2) 刃先が円いもの (Type b2 : biseau rond)
- (3) 刃先が角張ったもの (Type b3 : biseau anguleux)
- (4) 刃先が尖って弧線を描くもの (Type b4 : biseau demi-rond pointu)
- (5) 刃先が尖って斜線を描くもの (Type b5 : biseau oblique pointu)

である。彼の付図^⑯をもとにして分析を試みると、b1 は石刃の両面に対して直角に二つの彫刻器面を交叉させるか、あるいは平滑な切断面を利用して彫刻器面を垂直に打ち降すことによって得られる。彫刻器の刃先としては最も普遍的な形態に属する。b2 は彫刻器面あるいは、切断面に向かって幾つかの彫刻器面を打ち込んで並列させ弧状の刃先に仕上げる。b3 は彫刻器面あるいは切断面に向かって二つの彫刻器面を並列させる。この場合、石刃の両面に対しておのおの斜めに打ち重ねるのでその接点には稜線を生じ、先端は角張った刃先となる。b4 は一端の整形剥離が円

味を有する部分に向って彫刻器面を打ち降すとその断面は∧状を呈し、尖端とそれに連なる弧状の稜線が刃先となる。b5は整形剥離が斜めの部分に彫刻器面を打ち降すと断面は∧状を呈し、尖端から斜めの稜線にかけて刃先を形成する。また、b3の工程の途中において石刃の両面に対し斜めに一方だけ削ぎ落したところで中断すれば、やはり∧状の刃先が得られる。



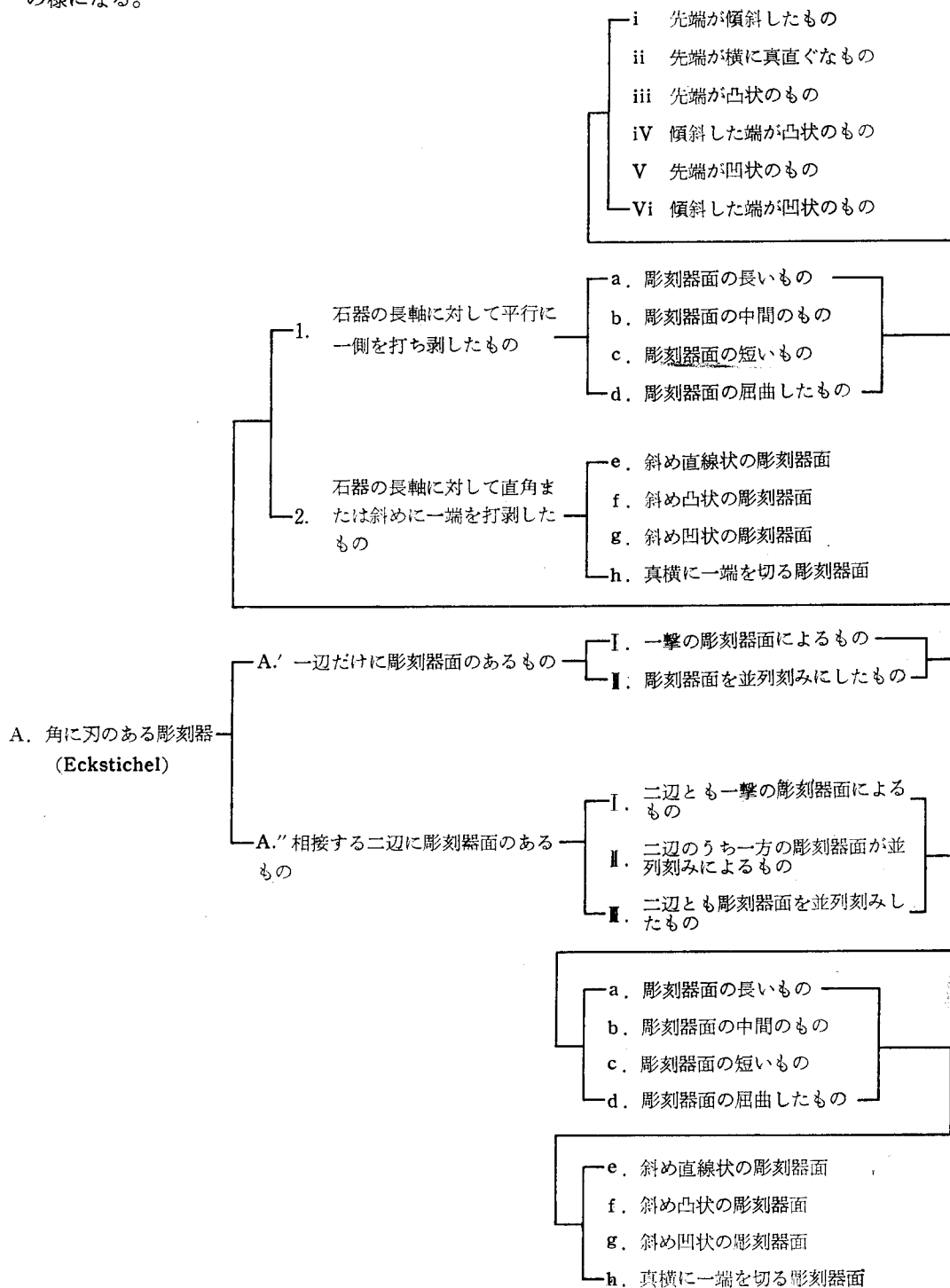
第2図 Ronen による彫刻器の刃先の分類

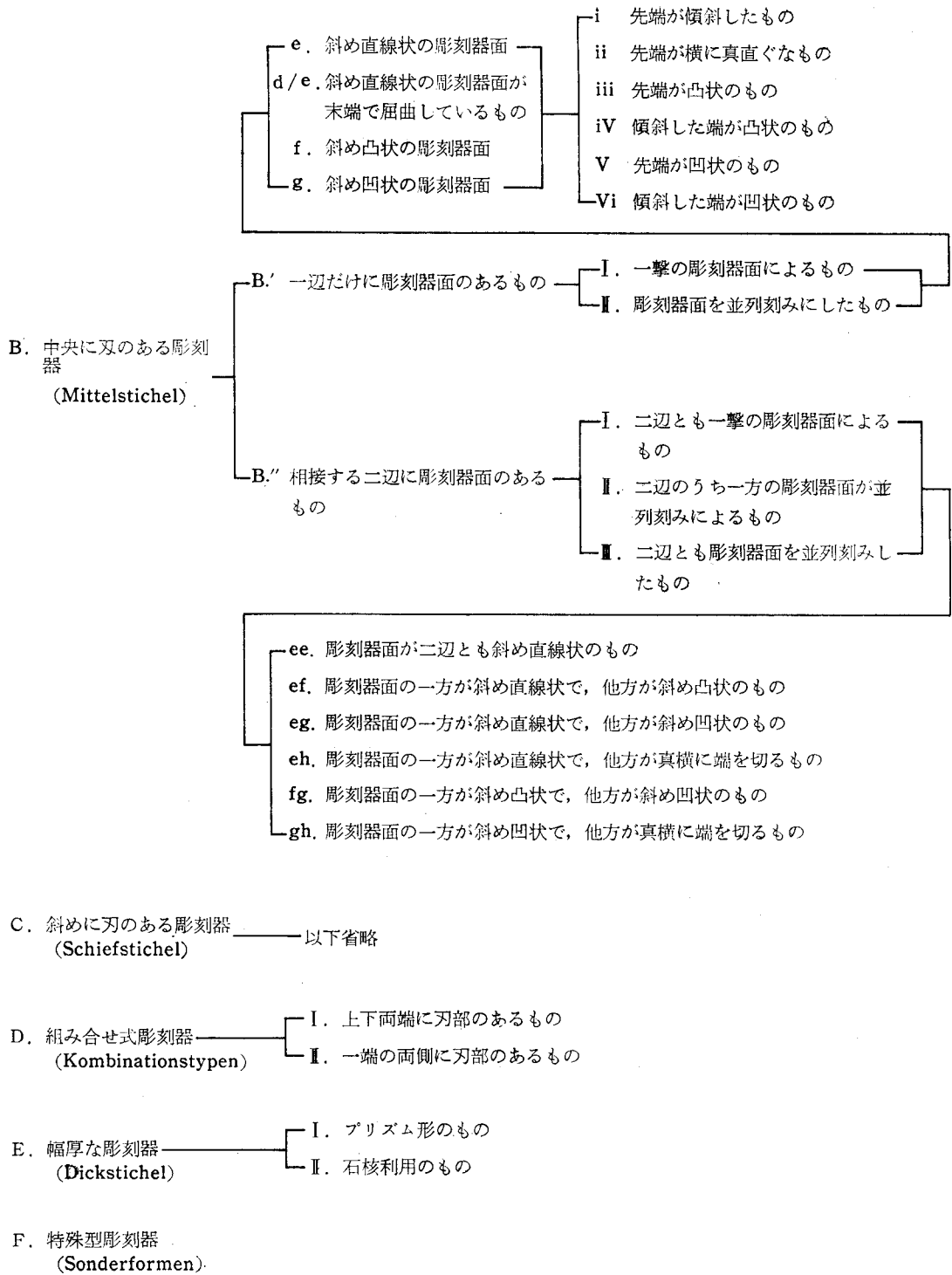
この Ronen の行った彫刻器の型式分類は彫刻器の側面観察に視点をおき、あくまでも刃先の形態分類を基礎としたところが最大の特徴である。その意味では Boulon や Burkitt の考えと共通する部分が認められる。すなわち、Ronen の b1 は Boulon の「真直ぐな刃先」であり、Burkitt の「ねじ回し形」に相当する。また、b2 は Boulon の「丸い刃先」であり、Burkitt の「円のみ形」に相当する^⑧。しかし Ronen はさらに b3, b4, b5 を識別して刃先の研究を一層進展させたといえよう。尤も形態分類に専心してその数を増やすことが決して妥当ではなく、Ronen 自身、論文の中で統計処理のために b3—4—5 を一括して刃先の尖った形態 (formes pointues) としてまとめている箇所さえある^⑨。したがって、たとえば 1934年に H. Noone が分類した9種類を数える彫刻器の刃先の形態^⑩は、なるほど刃先の変形の多様な状態を指摘してはいるが、型式学的に必要なかつ十分な刃先の形態はおおむね Ronen の分類に帰属させることができるのでここでは省略した。

Narr による彫刻器の型式図示

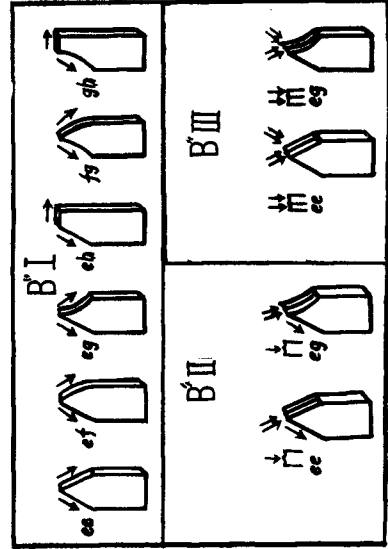
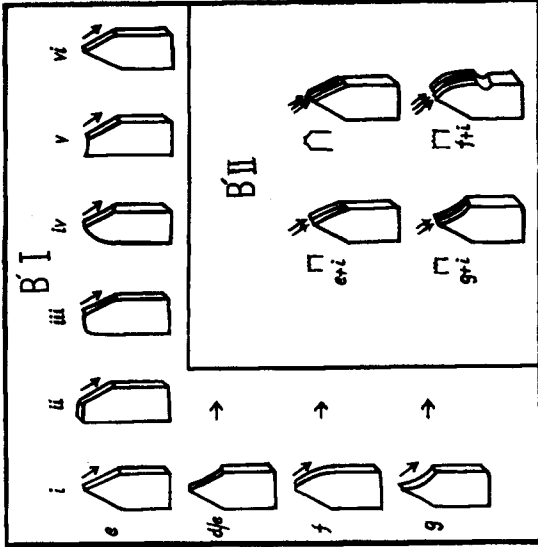
彫刻器に関する研究の主流は、むしろその穂先の平面観察による技術的形態の論考にあるといっても過言ではない。このうちで最も代表的なものに Narr の論文がある^⑪。

K. Narr は1955年に出版した“Das Rheinische Jungpaläolithikum”の中で西ドイツのライン地方における後期旧石器文化に関して具体的な石器文化の内容を説明するのに先立ち、石器の名称とその型式を出来る限り理解しやすくする意図から、ことに彫刻器についての解説と図示を行っている^④(第3図)。彼の論旨をとらえて繁雑な説明を避け、できるだけ簡略に整理すると次の様になる。

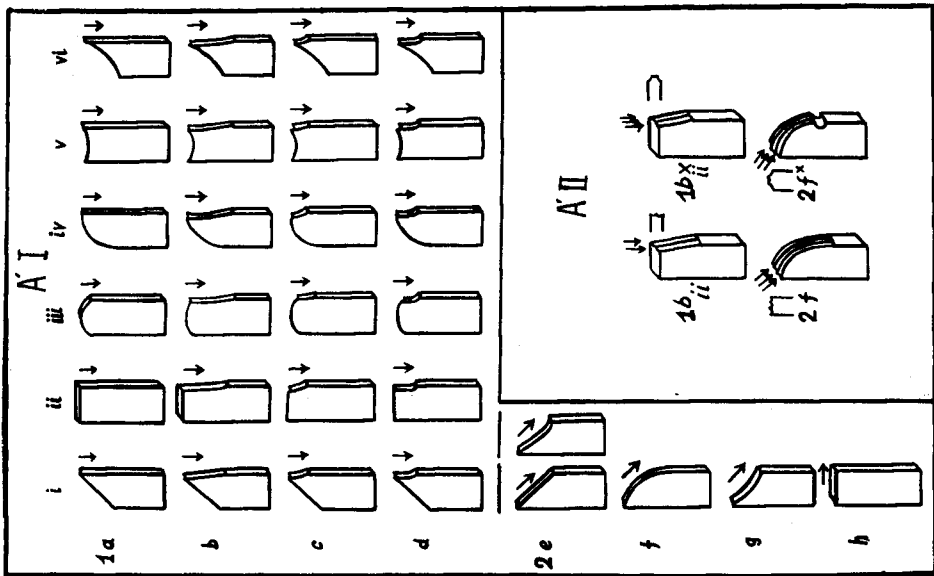
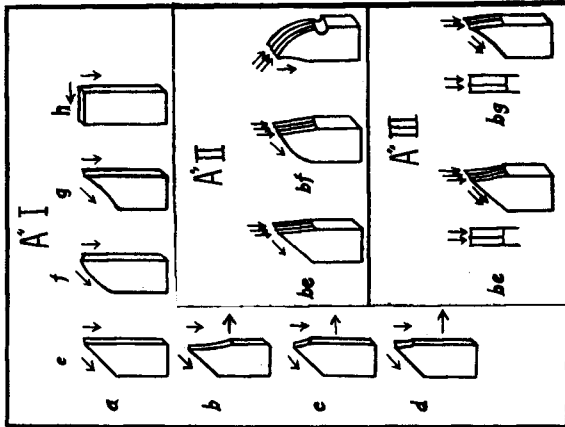




B



A



第 3 図
Narr による彫刻器
の型式図示

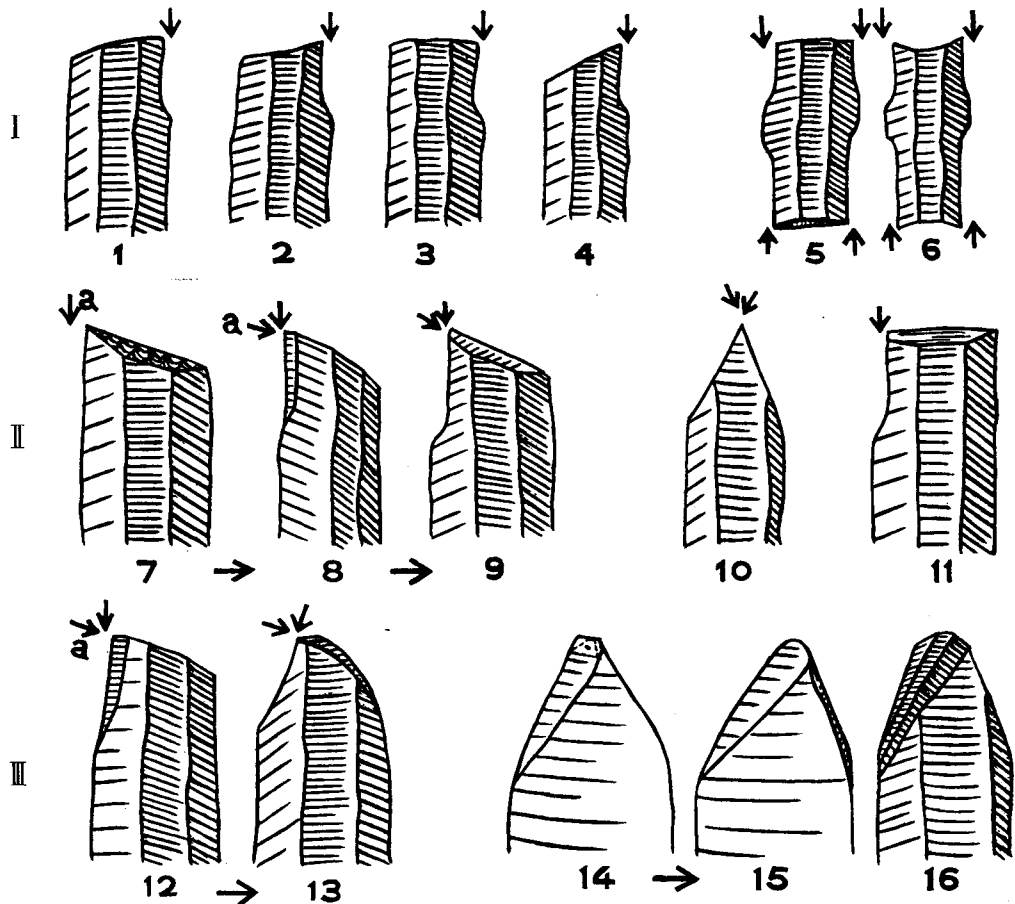
以上のような内容を考察して端的にその特徴をとりあげるならば、第一には、刃先の位置と彫刻器面の形態に基づく彫刻器の平面観察によって分類されたことであろう。刃先の形態よりもその位置を重視し、しかも、彫刻器面の方向、数、長短などを重点に置き、彫刻器面そのものが彫刻器の形態的型式を決定することを客観的に明示している。

そして第二には、彫刻器の平面観察に視点を置き、図示化に勉めたことである。ヨーロッパにおいては彫刻器は実に多種多様を極めているが、その中でも普遍的な型式を図解によって網羅し、理解を容易にしようとしていることは特筆すべきことであろう。

しかしながら、この Narr の分類と記述はあくまでも彫刻器面の特徴に基づく完成品としての各種彫刻器の形態表示であって、それらには彫刻器の製作過程をふまえた分類の展開がうかがわれない。さらにこうした彫刻器面の形態重視による分類図示の方法はややもすると機械的な羅列に陥り、彫刻器の実体を正確に把握する目的と必要かつ十分な型式学的分類をはなれて不必要かつ無意味な細分の域を出ない危険性を伴なう。

Bordes ならびに Leroi-Gourhan による彫刻器の型式概念

ヨーロッパの旧石器研究の中でも、その最も先進的なフランス先史学界においては彫刻器についてどのような概念が確立しているであろうか。その現状を把握するために旧石器研究の第一人



第4図 Bordes による彫刻器の諸型式

者として高名な F. Bordes と A. Leroi-Gourhan を選び、この両者の持論と概念を明らかにしておきたい。

Bordes の彫刻器に関する論考の一つは、1947年に発表した“Etude comparative des différentes techniques de taille du silex et des roches dures”において各種石器の製作過程、ことにその剥離技術の分析を行った中にみられる²⁰⁾。

それによると彼は彫刻器独特の製作技術のうえから、その種々の型式が「(I) 端を細かな二次加工によって断ち切った彫刻器(burins à troncature retouchée)」と「(II) 一端に集中させたふたつの剥離によってできる彫刻器(burins à deux enlèvements convergents)」との二系列に大別されると述べている²¹⁾(第4図)。そして前者には端の整形剥離が1. 凸状のもの(troncature convexe), 2. 凹状のもの(concave), 3. 真横のもの(droite), 4. 斜めのもの(oblique), 5・6. 両端の両側に刃のあるもの(burins quadruples)の各種をあげ、後者には、7→8→9. 一端を整形剥離した部分に彫刻器面を打ちおろし、さらにその彫刻器面を打面としてもうひとつの彫刻器面を打ち込んだもの(burin à double coup-de-burin), 10. フルートの歌口形²²⁾のもの(burin en bec-de-flûte), 11. 石刃を折り取った平坦面に彫刻器面を打ちおろしたもの(burin d'angle sur lame brisée à brisure droite)などの種類をあげている。さらにこの後者の変型として「(III) 12→13. 穂先の彎曲したもの(burin busqué)と 14→15(16). プリズム状のもの(burin prismatique)」を区別している。

つまり Bordes は

(I) = 端の整形剥離 + 彫刻器面の打剥

(II) = 一端の彫刻器面の打剥あるいは截断 + 彫刻器面の打剥

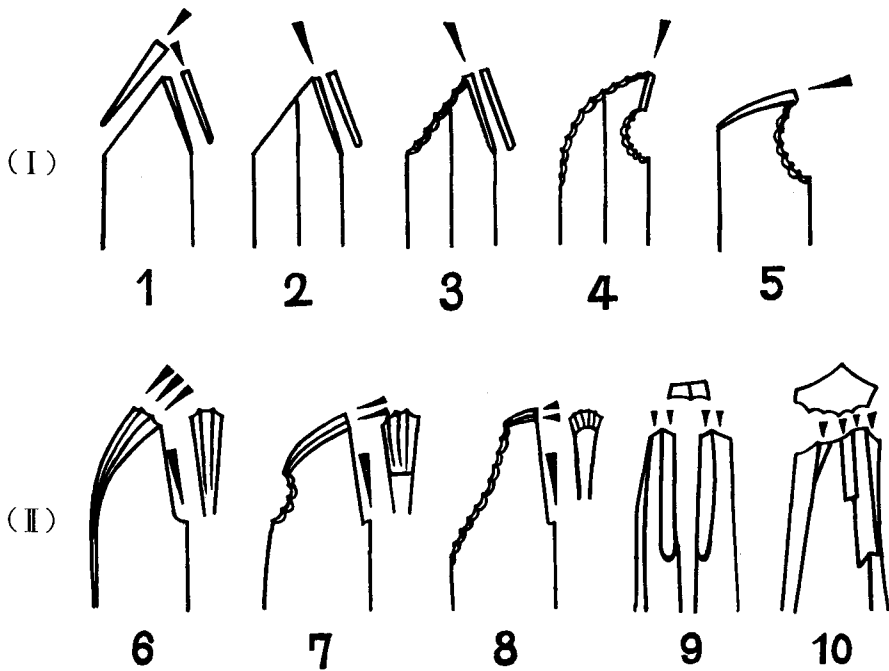
という彫刻器が製作される二つの根本的過程を見きわめ、端の整形剥離の変化とか彫刻器面の打剥の変化に応じてそこに型式学的細分の可能な彫刻器の各種型式が派生してゆくと考えている。彼の得意な製作過程をふまえた平面観察に基づく型式分類であることが看取される。

一方、Leroi-Gourhan は、1950年以降の著書の中で先史学の方法論に関してたびたび石器の型式論に言及しているが、1968年に出版した“La préhistoire”では石器、骨角器、土器などの解説のために注目すべき形態図示を行っている²³⁾。その中で多様な彫刻器の形態および型式の特徴を比較的要領よく図説し、まとめている(第5図)。彼は彫刻器を彫刻器面の数とその打ち込み方に基準を置いて「(I) 一つあるいは二つの彫刻器面を打剥したもの(burin à un ou deux enlèvements)」と「(II) 多数の彫刻器面を打剥したもの(burin à enlèvements multiples)」の二系統に分割した。

前者は1. 交叉する2面の彫刻器面のあるもの(dièdre), 2. 切断面に向って彫刻器面を打ち込んだもの(enlèvement sur cassure), 3. 端の整形剥離に対して彫刻器面を打ち込んだもの(enlèvement sur troncature), 4. 5. 刻み目を施したもの(burin sur coche)―ただし4は他側から刻み目に向って彫刻器面を打ち貫き、穂先きがオウムの嘴状を呈する(bec de perroquet), 5は刻み目の中から他側に向って彫刻器面を打ち貫き、一端を横断させた例(transverse)の5種類。

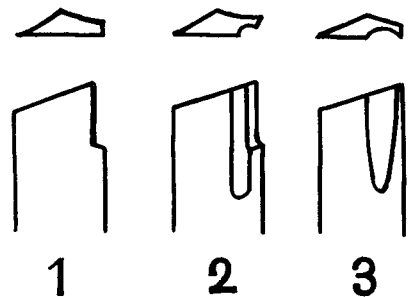
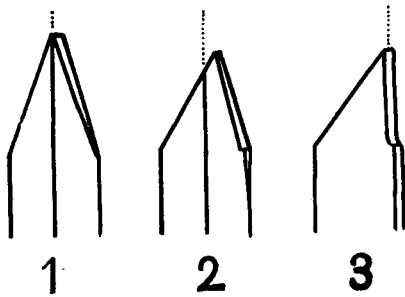
後者の6. 7. 8. は彫刻器面の並列剥離によって穂先きが彎曲したもの(courbes)―ただし6は狭長な彫刻器面を並列させて鼻形を呈する例(burin busqué), 7は一側に刻み目をもうけた

彫刻器面の数と打剥の変化

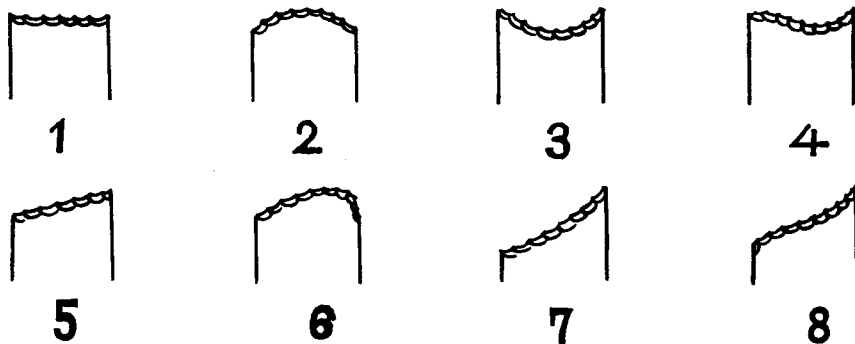


刃先 の 方向

彫刻器面の位置



整形剥離の形態



第5図 Leroi-Gourhan による彫刻器の型式分類

後、他側から彫刻器面を打ち込んだ鼻形の例(*burin busqué à encoche*)、8 は一側を斜めに整形剥離した後、他側から彫刻器面を打ち込み嘴状を呈する例(*burin bec*)、また、9、10 は垂直な彫刻器面を打ち重ねたもの (*droites*) — 9 は多面体を呈するもの (*burin polyédrique*)、10 は三角柱状を呈するもの (*burin prismatique*) など5種類を列挙している。

また、刃先の方角を区別して 1. 石刃の長軸中心線の上端にあるもの (*axe*)、2. その中心線からはずれて斜め横にあるもの (*oblique*)、3. 石刃の長軸の側線の上端にあるもの (*angle*) をあげ、さらに彫刻器面の位置を区別して 1. 石刃の両面に対して直角に上端から打剥したもの (*droit*)、2. 石刃の両面に対して斜めに打剥したもの (*tournant*)、3. 石刃の剥離面に打剥したもの (*plan*) をあげている。

なお、Bordes が製作過程で重視した一端を急角度に断ち刻む整形剥離 (*troncature*) については彫刻器の各型式とは別にして、石刃の長軸に対して垂直に切断したもの (*perpendiculaire*) と斜めに切断したもの (*oblique*) とに分け、1. と 5. は直線状 (*rectiligne*)、2. と 6. は凸状 (*convexe*)、3. と 7. は凹状 (*concave*)、4. と 8. は波状 (*sinueuse*) という形態変化を識別している。

以上のように Leroi-Gourhan の型式分類は平面観察に視点を固定し、彫刻器面の数、その方向、その位置、整形剥離の変化など四つの基準を複合させた多角的な特徴を有しており、彫刻器研究に関する過去の業績を取り入れた総合的な概念と判断される。

Sonneville-Bordes による彫刻器の型式表示

ヨーロッパにおける旧石器研究の宝庫として西南フランス一帯はすでに19世紀の初めから幾多の調査結果や研究成果の蓄積により膨大な資料を提出し、洪積世を通してフランコ・カンタブリアの地域では多岐にわたる旧石器文化の発展を示す複雑な文化複合を形成していることは周知の事実である²⁶。そうした実情の中にあって論旨により客観性を持たせ、より明確化を計り、研究の新分野を切り開く試みが20世紀の半—1950年代に到ってようやく敢行された。それは統計学的処理の導入による Bordes, Bourgen の前、中期旧石器²⁷ とこの Sonneville-Bordes の後期旧石器に関する画期的な研究がそれである。

D. de Sonneville-Bordes は1954年 “*Esquisse d'une évolution typologique du Paléolithique supérieur en Périgord*” と題する論文の中で南フランスのペリゴール地方を舞台として展開された後期旧石器文化の諸相を統計学的方法を用いて分析するための理論的骨子を完成している²⁸。そのうち、統計処理の前提条件として石器母集団を総計92の石器型式に分割し、標準化を行った。この中に彫刻器の型式表示があり、Sonneville-Bordes の彫刻器の型式概念と分類を知ることができる。それをつぎに列挙する。

17. 搔器と彫刻器の混合石器 (*grattoir-burin*)
19. 彫刻器と截頂石刃²⁹の混合石器 (*burin-lame tronquée*)
22. 石錐と彫刻器の混合石器 (*perçoir-burin*)
27. 二つの彫刻器面の交叉が石刃長軸の先端中央にあるもの (*burin dièdre droit*)
28. 二つの彫刻器面の交叉が石刃長軸の中心より外づれるもの (*burin dièdre déjeté*)

29. 二つの彫刻器面の交叉が石刃側縁の角にあるもの (burin dièdre d'angle)
30. 切断面に彫刻器面を打ち降した角形彫刻器 (burin d'angle sur cassure)
31. 27から30までを組み合わせた複合彫刻器 (burin dièdre multiple)
32. 28か29の上端に数個の彫刻器面を並列させ、穂先きの彎曲したもの (burin busqué)
33. 弧状に整形剥離した上端をオウムの嘴状に打剥したもの (burin bec-de-perroquet)
34. 一端の整形剥離が真横に直線状をなすもの (burin sur troncature droite)
35. 一端の整形剥離が傾斜しているもの (burin sur troncature oblique)
36. 一端の整形剥離が凹状を呈するもの (burin sur troncature concave)
37. 一端の整形剥離が凸状を呈するもの (burin sur troncature convexe)
38. 石刃の長軸に沿った整形剥離に対して先端に彫刻器面を横断させたもの (burin transversal sur troncature latérale)
39. 38の整形剥離が抉入するもの (burin transversal sur encoche)
40. 34から39までを組み合わせた複合彫刻器 (burin multiple sur troncature)
41. 27から30と34から39を各々組み合わせた複合彫刻器 (burin multiple mixte)
42. 極小の石刃を用いて整形剥離と彫刻器面を打ち重ね、しばしば複数の刃先きを有するノアイユ型彫刻器 (burin de Noailles)
43. 石核利用のもの (burin nucléforme)
44. 彫刻器面が石刃の両面に対して施された平坦彫刻器 (burin plan)

なお上記の各項目を明確にするため、各々の彫刻器の例品を図示する。これは Sonnevile-Bordes が1955年と56年に “Lexique typologique du Paléolithique supérieur” という型式解説集を公表しているのでその掲図から適当なものを抽出した^⑧(第6図)。

Sonneville-Bordes による以上の彫刻器に関する合計21にわたる項目がただちに彼の型式分類を示すものとは思われない。それらはあくまでも統計処理を目的とした標本だからである。そこで型式分類として整理してみると次のようにまとめることができる。

17, 19, 22は彫刻器の形態別型式ではなく、彫刻器と異った機能を有する刃部が混合していることを示す、いわば機能別型式の分類に属する。

そしてその観点に立てば、31, 40, 41は彫刻器として同じ機能が複合していることを示す機能別型式である。

42の Noailles 型彫刻器はペリゴール期後葉の中に出現する、いわば文化的特殊型式。

43は石核を再利用するという素材上の特殊型式。

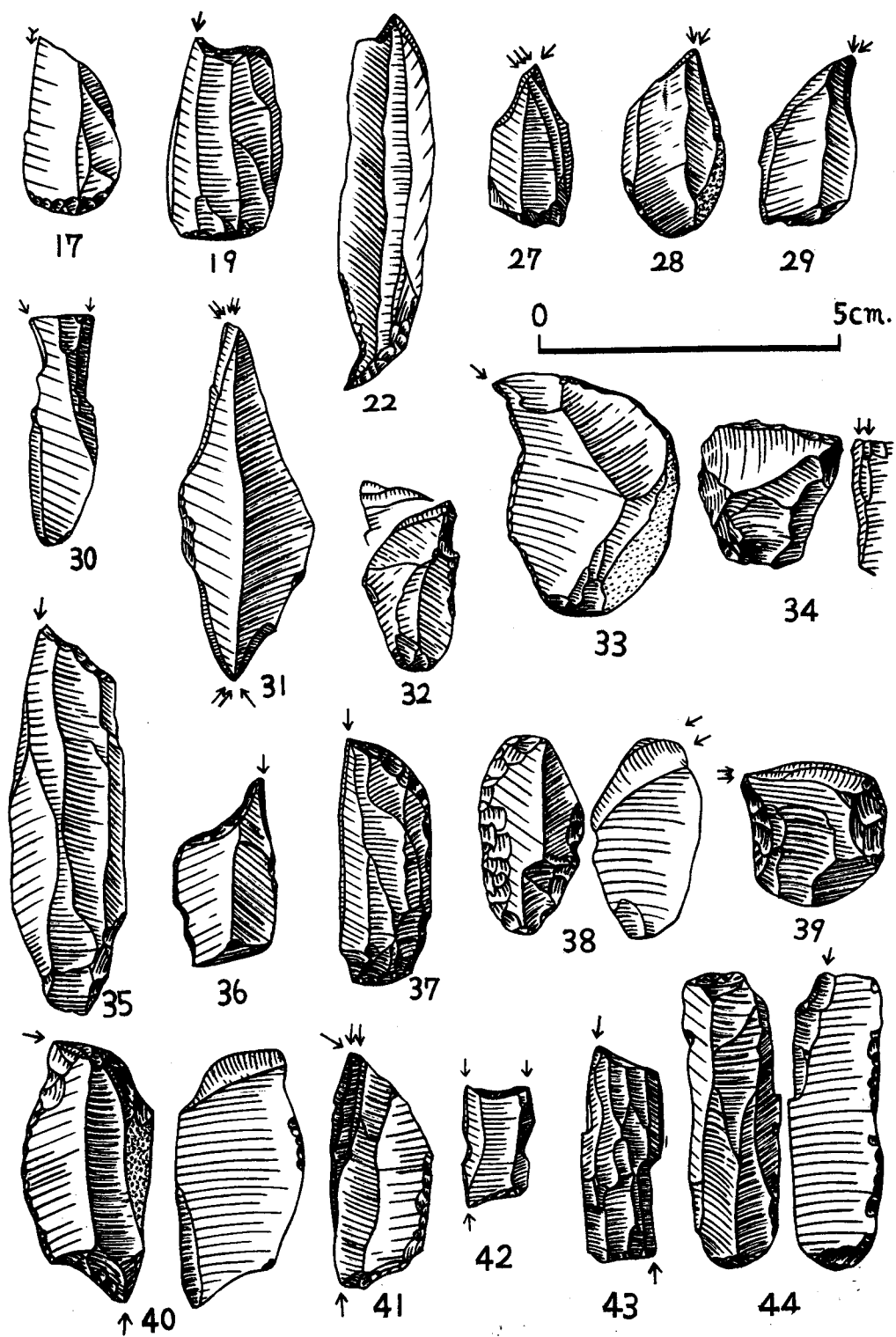
44は彫刻器面が石刃の表裏両面に施されるという打剥の位置についての特殊型式。

こうして最後に残る項目が普遍的な彫刻器の穂先きの平面型態を彫刻面の位置と数とに基準を置いて型式分類できるものである。

(I) 27, 28, 29, 30, 32—彫刻器面だけの組み合わせによるもの

(II) 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39—整形剥離と彫刻器面の組み合わせによるもの

これは Bordes の型式分類と基本的に一致するものであり^⑨, Leroi-Gourhan も容認している概念に通ずる^⑩。



第6図 Sonneville-Bordes による彫刻器の諸型式

Pradel による彫刻器の分類

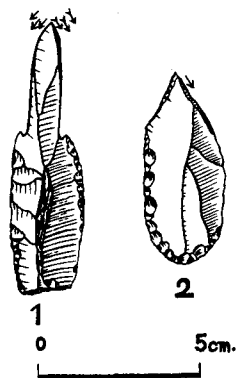
西南フランスにおける後期旧石器文化を通じて相対的に彫刻器の比率が大きいのは、オーリニャック期終末、ペリゴール期後半、終末をのぞくマドレーヌ期などをあげることができるが^⑧、その種類と数量の豊富な資料に基づく型式分類を検討してみることはぜひ必要である。そこで代表的なものとして Pradel の発掘した Raysse 遺跡の資料を選んだ。

L. Pradel は彫刻器の型式分類を目的とした論文はこれまでに執筆していないが、1966年に発表したフランスの Raysse 岩陰の調査報告書“La station Paléolithique du Raysse”の中に彫刻器に関して注目すべきいくつかの記述があり、彼の非凡な石器に対する観察をみのがすことはできない^⑨。この Raysse 岩陰はすでに1866年以来度々調査されている有名な遺跡であり、約4mにも達する砂礫層の中にオーリニャック期I、ペリゴール期Vc (Noailles évolué)、ソリュートレ期の三つの文化層が介在する。このうちでペリゴール期Vc層から出土した総数1264個の石器の中に1024個の彫刻器が存在し、実に多種多様な型式をみることができる^⑩。

Pradel はこの圧倒的數量の彫刻器を分類するにあたって、(I)直線状の剥離稜^⑪を有する石刃を用いた彫刻器 (burins à arête rectiligne 734個)、(II)折線あるいは曲線状の剥離稜を有する石刃を用いた彫刻器 (burins à arête brisée 290個)に大別する。つまり前者は真正な石刃^⑫を、後者は粗雑な石刃^⑬か、あるいは裂片^⑭を素材に供することと理解される(第7図)。

まず、(I)は次の4種類に分類される。

(1) 石刃の長軸の中央先端に刃のある彫刻器 (burins d'axe 66個)

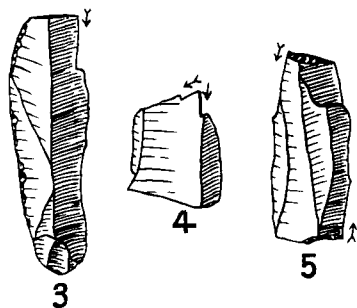


第7図-1・2

これはいわゆる普通型 (ordinaire) という彫刻器面を交叉させ、二面角の稜を刃先とした型式で、その彫刻器面が一回の打剥で形成されるもの (facette simple) と数回の打剥で完成されるもの (facettes double-1) とがある。また、斜めの整形剥離に向って彫刻器面を交叉させたもの (troncature retouchée-2) もある。

(2) 石刃の側縁の角か石刃の長軸中心よりはずれた位置に刃のある彫刻器 (burins d'angle et déjetés 429個)

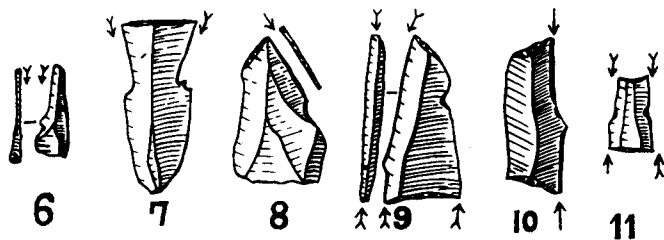
これは石刃の横断面に対して彫刻器面を打ちおろしたもの (cassure-3)、二つの彫刻器面を交叉させたもの (enlèvements inverses-4)、石刃の先端を真横に整形剥離を施した後、そこに彫刻器面を打ちおろしたもの (troncature retouchée-5) などがある。



第7図-3~5

(3) Noailles 型彫刻器 (burins de Noailles 85個)

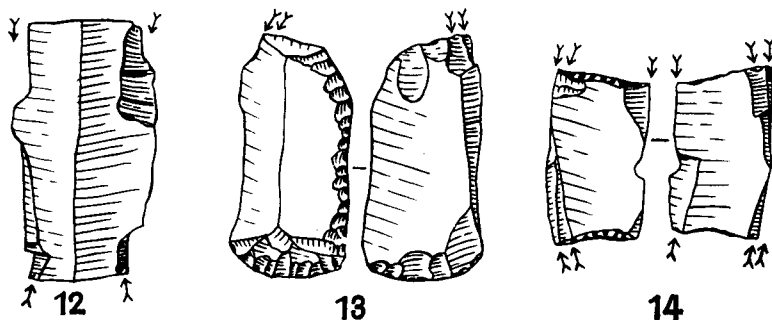
これは小形石刃の先端の切断面に対して彫刻器面を片側に打ちおろしたもの (cassure simple-6) と両側に打ちおろしたもの (cassure



第7図—6~11

(axe—8), 石刃の先端の中央より逸れた部位に刃のあるもの(déjetés—9), 石刃の角に刃のあるもの(angle—10)がそれである。なお、このNoailles型彫刻器は一刀(simple—8), 二刃(double—7, 10), 三刃(triple—9), 四刃(quadruple—11)が存在する。

(4) 石刃の表裏の剥離面に対して彫刻器面が打ちこまれた彫刻器(burins plans 154個)



第7図—12~14

これは石刃の一端の平滑な横断面(surface lisse)に対して唯一の彫刻器面を打剥したもの(un seul enlèvement—12), 同じく二つ以上を打剥したもの(2 ou plusieurs enlèvements—13)がある。また、石刃の一端を整形剥離(troncature retouchée)した後、そこに向かって彫刻器面を一つ打剥したもの(un seul enlèvement)と同じく二つ以上打剥したもの(2 ou plusieurs enlèvements—14)とがある。

他方、(II)は次の5種類に分類される。

(1) いわゆる普通型彫刻器(burins d'axe—11個)

前述のIと同様の型式種別がある。

(2) いわゆる角形彫刻器(burins d'angle 5個)

(3) いわゆる平坦彫刻器(burins plans 67個)

前述のIと同様の器種がある。

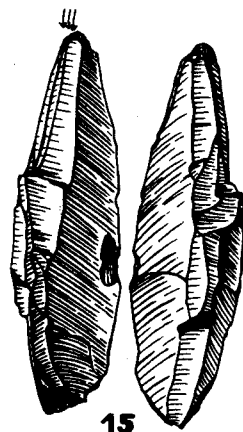
(4) 剥片の形態に影響され、あるいは多数の彫刻器面を打剥した結果、プリズム状または多面体を呈する彫刻器®(burins prismatiques et polyédriques 34個—15)。

(5) 彫刻器面を剥片の側縁からそれに連なる表あるいは裏の剥離面にまで打ち重ね、そこに形成される上端の稜線を刃先とした彫刻器(burins d'angle et plan 173個)

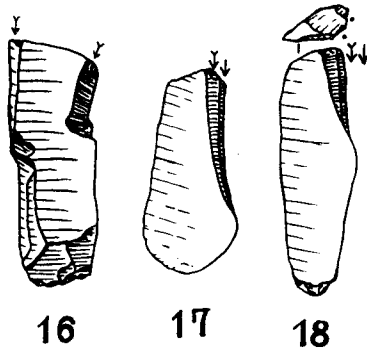
この種の通常みられる型式(type courant)は剥片の切断面(troncature lisse)に対して唯一の彫刻器面

double—7)がある。また小形石刃に対して端の整形剥離を加えた後、そこに彫刻器面を打ちおろした型式(troncature retouchée)が三つに分けられる。すなわち石刃の先端の中央に刃のあるもの

これは石刃の一端の平滑な横断面(surface lisse)に対して唯一の彫刻器面を打剥したもの(un seul enlèvement—12), 同じく二つ以上を打剥したもの(2 ou



第7図—15



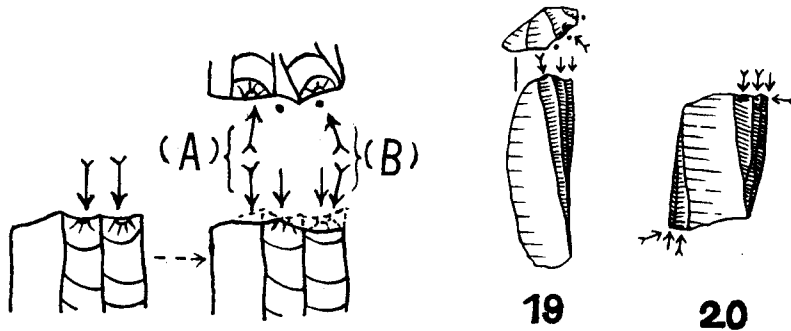
第7図—16~18

を打ち込んだもの (1 seul enlèvement plan—16) と二つ以上の彫刻器面を打ち並べたもの (2 ou plusieurs enlèvements plans—17) や、また一端の整形剥離 (troncature retouchée) を施した上にひとつの彫刻器面を打ちこんだもの (1 seul enlèvement plan) と二つ以上の彫刻器面を打ち並べたもの (2 ou plusieurs enlèvements plans—18) がある。

Pradel が分類したいま一つの型式は Raysse 型 (type du Raysse) と称する特殊型式である。煩

雑な説明をさげ、(A), (B) 2種を図解する。

石刃の表または裏の剥離面に打ちおろされた彫刻器面に対して、Raysse 型独特の「残留打面



第7図—(A), (B), 19, 20

の除去^④」をおこなう。この場合、(A) その彫刻器面に隣接する石刃の一次剥離面に向ってもう一つまたは複数の彫刻器面を打ちこむ (extrémité découronnée restée lisse)。 (B) 同じく残留打面の除去を目的としてその彫刻器面に向ってさらに一つまたは複数の彫刻器面を打ちこむ (extrémité découronnée retouchée secondairement)。いずれにしても、石刃の一次剥離面と上端の打面とに交叉した彫刻器面を打ちこむわけであり、さしずめ角形平坦彫刻器^④の特殊型式であろう—19, 20)。

以上のような分類を検討してみると、Pradel の彫刻器に関する型式分類上の特徴は次の四点をあげることができる。

第一は、彼が彫刻器の製作に用いられている材質の相違、すなわち扁平で側縁や剥離稜が直線的な真正の石刃と厚さや剥離形態の不定形な石刃とか裂片の類とに大別したのは、製作者の意図する彫刻器の型式ならびに数量と製作者の素材の選択とが密接に関連していることが認められるからである。端的な具体例として石片素材のⅠ群では角形彫刻器が圧倒的に多いのに、それが裂片素材のⅡ群の中では最も少く、逆に平坦彫刻器が著しい。

第二は、刃先が石刃の先端の中央、あるいは片寄り、あるいは側縁の角という平面観察上の刃先の位置を分類の要としたことは、彫刻器の機能を考慮した分類の証拠である。一例をあげるならば、同じ彫刻器でも Sonnevile-Bordes の 27. burin dièdre droit^④ と Pradel の burin d'axe^④

という表現の相違にそれをはっきりと認めることができる。

第三は、彼の機能重視の分類と関連して平坦彫刻器や角形平坦彫刻器の明確な細分である。たまたまこの *Raysse* 遺跡に顕著であるという特殊な状態かもしれないが、本質的に多種多様で型式分類の厄介な平坦彫刻器を整頓したことは注目に値する。ことに平坦角形彫刻器の存在を角形彫刻器および平坦彫刻器のカテゴリーから識別したことは、実に 173 個（彫刻器総数の約 17%）出土したという歴然たる事実とあいまって、むしろこの種の型式を例外的とみる従来の態度を改めなければならない。

第四は、彼が特定型式を重視して、たとえば *Raysse* 型を設定していることである。これは最小限この *Raysse* 遺跡の生活者による石器製作上の「癖」か、最大限 *Noailles* 型と同様に一定の文化段階での「流行」か、いずれにしても製作技術上の些細な型式の変化を見逃さないで、彫刻器の機能を念頭においた型式分類を行っている。この点が *Sonnevilles-Bordes* のように統計処理を考慮した分類と大きく異なる所以であろう。

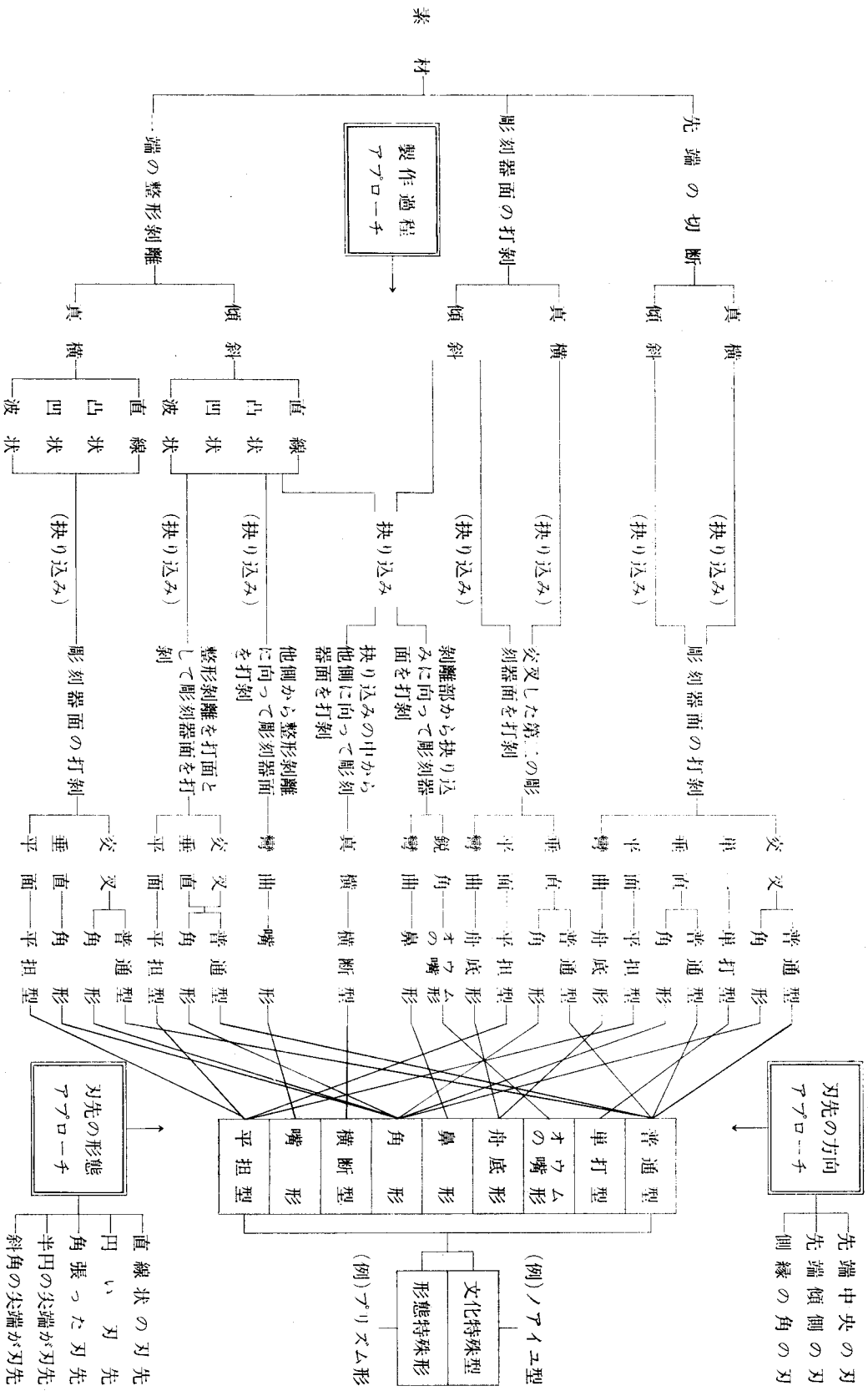
Ⅲ 分析と総括

形態別型式の総括

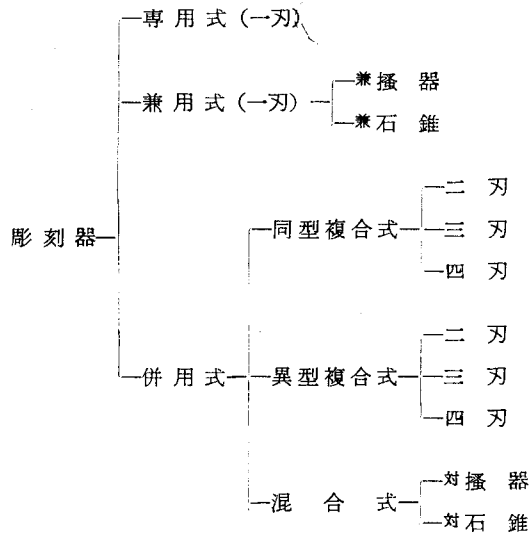
前章において検討してきた諸学者の彫刻器に関する型式分類に扱われたその基準およびその概念は、(A) *Boulon*, *Burkitt*, *Ronen* が適用した「彫刻器の刃先の形態」に基づくもの。(B) *Leroi-Gourhan* と *Pradel* が採用した「彫刻器の刃先の方向」によるもの。(C) *Bordes* をはじめ、ほとんどの研究者が何らかの形で考慮している「彫刻器の製作過程」に基づくもの。など三つのアプローチに区別することができる。

彫刻器の「刃先の形態」と「刃先の方向」とに注目することによって、彫刻器としての機能をはたす最も主要な部分の形態変化とその位置を識別し、分類することは、彫刻器の機能に関する研究を進展させるために確かに不可欠な基本的要素であろう。しかしながら、彫刻器のメカニズムの解明とそのバラエティに富む諸形態を系統的に分類するためには「彫刻器の製作過程」を明らかにし、そこから導き出される各種の彫刻器を摘出することが最も適切な形態別形式を設定できる方法であると考えられる。

この「製作過程」に基づくアプローチの第一段階は、石刃、裂片、稀に石核などの素材に対して(1)先端の切断、(2)最初から彫刻器面を打剥、(3)一端を数回の剥離によって整形、の三つの準備作業のいずれかがおこなわれる。続いて第二段階は、殊に横断型、オウムの嘴形、鼻形などの彫刻器が製作される場合、必ず凹状の抉り込み (*coche*) を刻み、その凹みを彫刻器面の打剥点としたり、また彫刻器面の長さを限定するため (*stop notch*) に用いられる。そして第三段階において彫刻器面を二つ交叉させたり、垂角にあるいは彎曲させて打剥することにより普通型、角形、単打型、舟底形あるいは鼻形、嘴形、オウムの嘴形、横断型、平坦型など 9 型式の彫刻器ができる。わけても普通型と角形は製作工程の分析によって最も普遍性の大きい彫刻器であるといえよう。



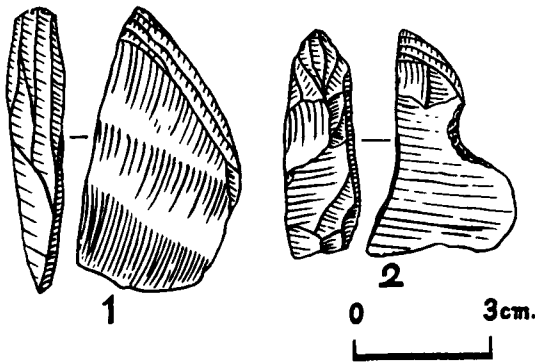
機能別型式の総括



彫刻器を機能の上から専用，兼用，併用の三つに分類しうる。

専用式とは，彫刻器の大部分を占める単独唯一の刃部をもつ普遍的な型式を指す。

兼用式とは，一刃を以て彫刻器の機能と，さらに他の石器の機能をも果たしたと思われる形態的に明確な区別ができない型式を指す。たとえば（第8図），1はオーリニャック期後半に顕著な



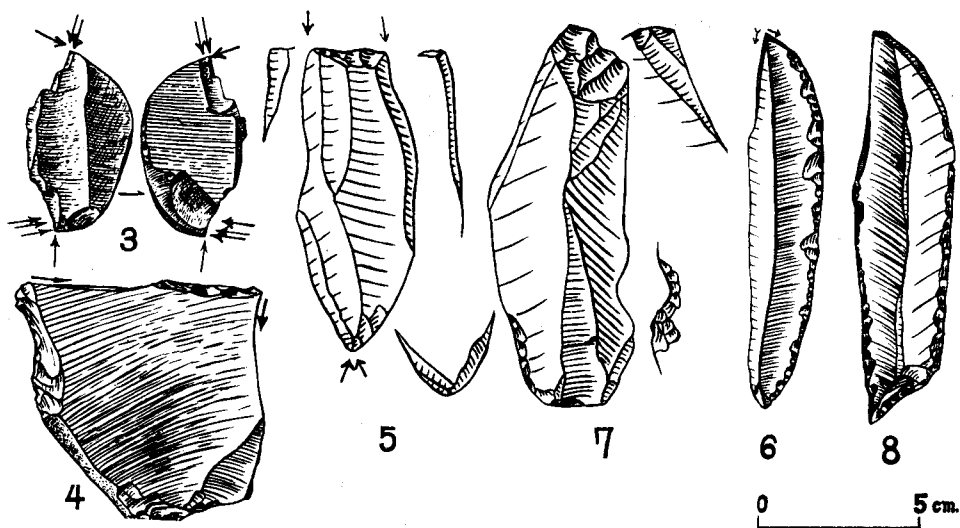
第8図

舟底形器搔の製作技術の影響を濃厚にうけ，刃部の形態は搔器であるのに狭長な穂先と並列剥離は彫刻器そのものである。また2は穂先が舟底形搔器の手法で製作され，しかも刃先が石錐のように bec とか Zinken に似て突出し，加えて彫刻器特有の抉り込みが施されている。両者とも Roches 岩陰出土^⑥。この種の特徴的な石器については，M. Perpère

が西南フランスの Poitou-Charentes 地方におけるオーリニャック文化の研究を通して重要な問題点のひとつとして提起しており，はたして舟底形搔器か，あるいは舟底形彫刻器なのか明確に区別することの困難な事実を指摘している^⑦。つまり急角度な刃部の形成というオーリニャック文化の顕著な特徴が彫刻器の形態にも大きく影響を与えている。

併用式とは，単一の石器に二つ以上の刃部を有するものを指す。ただしこの場合，その複数の刃部がすべて同じ型式で製作され，彫刻器として同一機能を果たす同型複合式。その複数の刃部が異なった型式に製作されてもそれぞれ彫刻器として同じ機能を果たす異型複合式。また，その複数

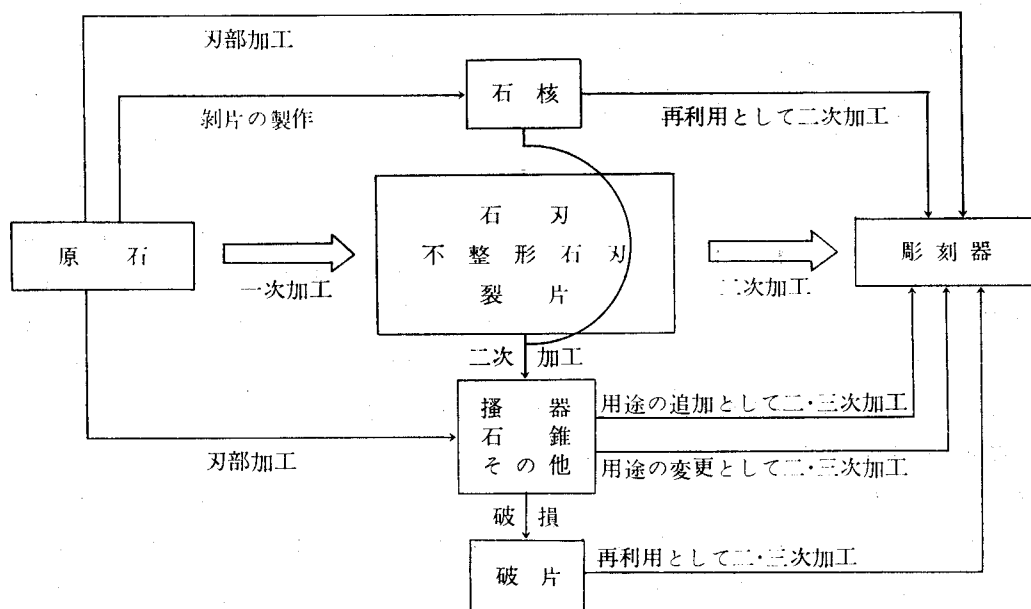
の刃部が彫刻器の刃に加えて別の器種の刃で構成された混合式の三つに分類される。



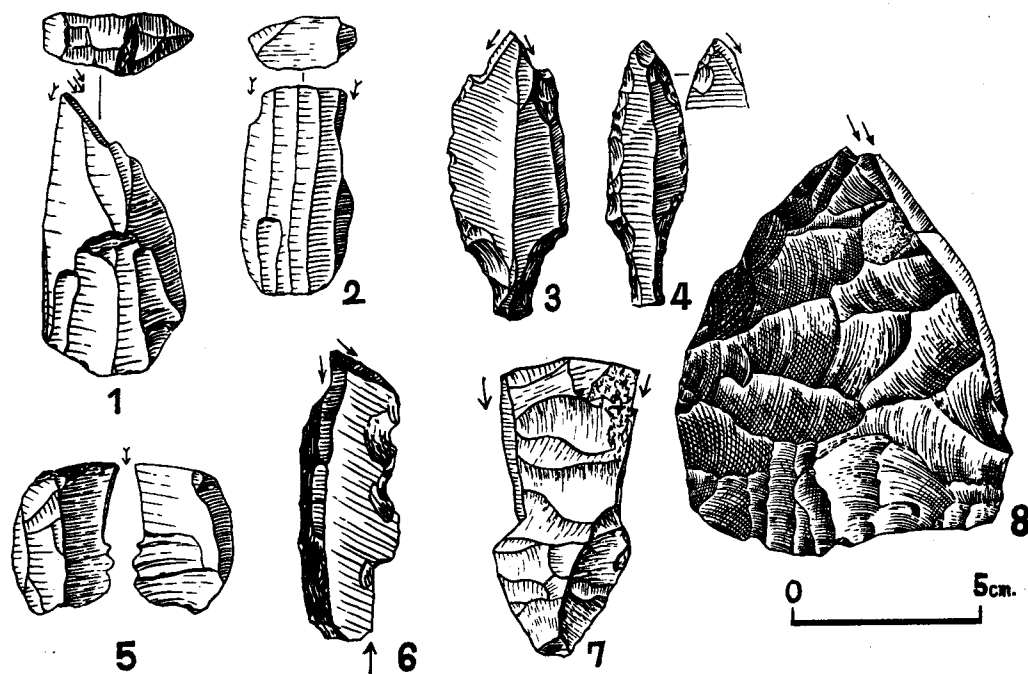
第 9 図

たとえば(第9図), 同型複合式-3のように上下両端が同じ鼻形を呈する。Bois d'Apres 遺跡^④出土。4は剥片の二箇所に同様の整形剥離と彫刻器面を打刺したもの。Vachons 遺跡出土^④。異型複合式-5は石刃の上端の両側に角形を二つ, 下端に普通型を一つ有する三刃の彫刻器。La Ferrassie 岩陰出土^④。混合式-6は片側を側刃搔器とした角形彫刻器。Raysse 遺跡出土^④。7は一側に挟り込みをつけて凹刃搔器とした平担彫刻器。Saint-Christophe 岩陰出土^④。8は下端が石錐, 両側が側刃搔器, そして上端が普通型彫刻器の三重混合式。La Placard 洞窟出土^④。

製作素材の総括



すべての石器がそうであるように、彫刻器もまた大部分のものは材石から打ち剥された石刃、裂片などの剥片類を素材とする。ただ稀ではあるが、残核の利用、他種の石器に対して併用式として追加加工あるいは他種の石器を改造、石器の破片の再利用などにより彫刻器が製作されている場合がある。これらは例外的な素材とみることができる。



第 10 図

その実例(第10図)として、例えば1は石刃核の一端に再加工して普通型彫刻器に、2は石刃核の二箇所に彫刻器面を打剥した角形彫刻器。ともに Raysse 遺跡出土^⑤。3・4は Font-Robert 型尖頭器の先端を再加工して彫刻器に転用。ともに Vachons 洞窟出土^⑤。5は pièce esquillée に彫刻器面を追加した角形彫刻器。ともに Raysse 遺跡出土^⑤。6はナイフ形石器の破片を再利用。Vachons 洞窟出土^⑤。7は月桂樹葉形尖頭器の破片を再利用。Badegoule 遺跡出土^⑤。8はハンドアックスの破片を再利用。La Pluche 遺跡出土^⑤。

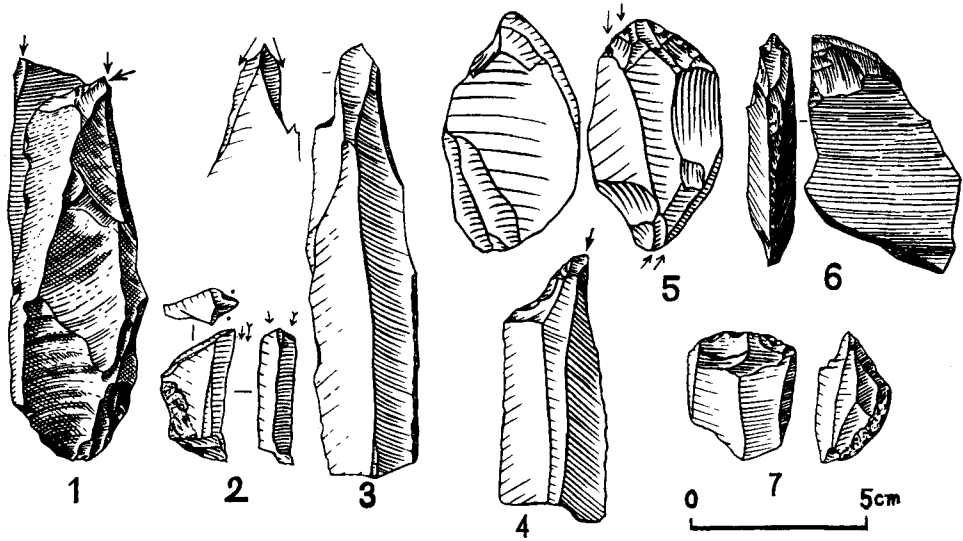
特殊型式の総括

特殊型式は文化特殊型と形態特殊型に分割することが可能である。

前者は、例えば Noailles 型彫刻器とか Raysse 型彫刻器のように、特定の文化段階における地域的流行ないしは個人的習性の具象化であり、きわめて集中的かつ限定的な存在である。こうした観点にたてば、マドレーヌ期終末に顕著なオウムの嘴型彫刻器は文化特殊型のカテゴリーに入れるのが妥当であるかもしれない。

それに対して後者は、例えばプリズム形彫刻器にしても多面体彫刻器にしても特殊な素材の形

態および彫刻器面の打ち重ね方などに影響された結果であって、一定の時代や地域に関係なく、製作上の条件次第で普遍的な型式とともに偶発的に作り出される。したがって厳密に摘出するとこの種の彫刻器の形態は限りがない。ちなみに若干の例品をあげれば次のようなものがある。



第 11 図

平担彫刻器の特殊型 (第11図)

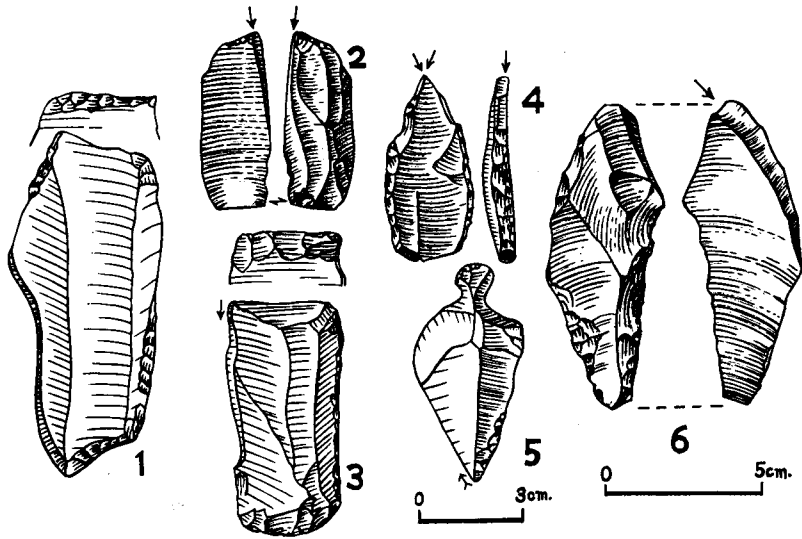
1は二つの彫刻器面を先端の表裏両面に交叉させた両面平担彫刻器[Ⓢ] — Bois d'Apres 遺跡出土[Ⓢ]。2は二つの彫刻器面を石刃の一侧の両面に打ちおろし、角張った刃先にした両面平担彫刻器 — Raysse 遺跡出土[Ⓢ]。3は石刃の裏面に二つの彫刻器面を交叉させたフルートの歌口形の平担彫刻器 — Bassaler-Nord 洞窟出土[Ⓢ]。4は先端の整形剥離に対して表面に彫刻器面を打ち込んだもの — Fontalès 岩陰出土[Ⓢ]。5は上下両端とも平担彫刻器のもの — Saint-Christophe 岩陰出土[Ⓢ]。6は先端の両面に彎曲した彫刻器面を打削し、舟底形搔器に似た手法による特異な Vachons 型彫刻器 — Vachons 岩陰出土[Ⓢ]。7は厚手の剥片の一端に彫刻器面を両面にわたって粗く打ち削した鑿形彫刻器[Ⓢ]とよばれる特殊型式 — Raysse 遺跡出土[Ⓢ]。

刃先の特殊な作成 (第12図)

1は先端の裏面をまず整形剥離した後、表面の両角を小刻みに再加工してそれぞれ裏面の整形剥離と交錯させ、その交点を刃先とする、いわば “type retouché” — Laugerie-Haute 洞窟出土[Ⓢ]。

特殊な整形剥離 (第12図)

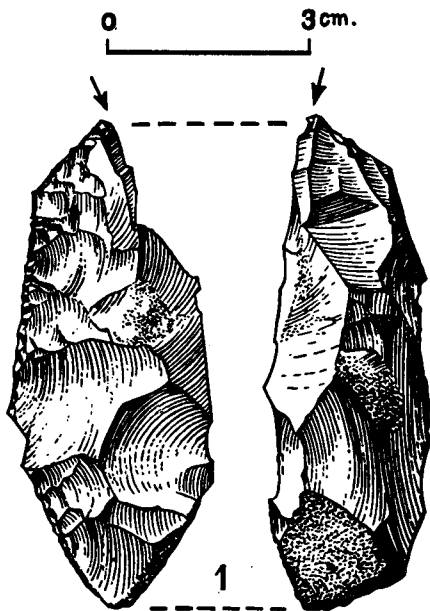
2は上端の整形剥離がその表裏両面におよぶもの — Bois d'Apres 遺跡出土[Ⓢ]。3は上端の整形剥離がその裏面におこなわれるもの — Brun ブドウ園遺跡出土[Ⓢ]。4は剥片の両側を丹念に整



第 12 図

形したもの— Bois d'Apres 遺跡出土^⑦。6 は下半を着柄のための茎を作り出すような整形をしたもの— La Colombière 岩陰出土^⑧。5 は上端の両側に挟り込みのある彫刻器— Raysse 遺跡出土^⑨。

特殊な素材の彫刻器 (第13図)



第 13 図

1 は断面三角形に剥離された礫核の先端に彫刻器面をみとめることのできる特殊な形態。Movius は多目的に用いたことを指摘している— La Colombière 岩陰出土^⑩。

(註)

- ① 大山 柏 1928, 考古学講座—欧州旧石器時代. 雄山閣, 正編1~269頁, 続編1~139頁.
- ② 芹沢長介 1957, 考古学ノート・先史時代(I)—無土器文化(駒井和愛・八幡一郎監修). 日本評論新社, 41~42頁.
芹沢長介 1962, 考古学の方法—遺物の機能と形式(江上波夫・水野清一編集 世界考古学大系 第16巻 研究法・索引). 平凡社, 51頁.
- ③ 角田文衛 1959, 旧石器・中石器時代(八幡一郎・石田英一郎編集 世界史大系1・先史時代). 誠文堂新光社, 83~84頁.
- ④ Burkitt, (M.C.) 1921, *Prehistory (A study of early culture in Europe and the Mediterranean basin)*. London, pp. 68~71.
- ⑤ 英語の *graver facet*, 仏語の *pan de burin*, 独語の *Stichelbahn* などの表現を考慮して、ここでは「彫刻器面」という直訳語を用いておく。
- ⑥ Burkitt, (M.C.) 1949, *The old stone age (2ed.)*. London, p. 61.
- ⑦ 「普通型」という訳語を借用。ホルド, (F.), 芹沢長介・林 謙作訳 1971, 旧石器時代(世界大学選書 023). 平凡社, 163頁.
- ⑧ 彫刻器の刃先を作成するために彫刻器面を打削するのにききだつ準備作業という意図を考慮して「整形剥離」という語を用いる。Burkitt は *the trimmed edge* という表現をしている。
- ⑨ 「角形」という訳語を借用。芹沢長介 1957, 前掲書, 41頁.
- ⑩ 「单打」という訳語を借用。同 著, 41頁.
- ⑪ 「多面体」という訳語を借用。同 著, 41頁.
- ⑫ 「嘴」という訳語を借用。同 著, 41頁.
- ⑬ 「平担」という訳語を借用。同 著, 42頁.
- ⑭ Boulon, (M.) 1911, *Essai de classification des Burins. Revue de l'Ecole d'Anthropologie*, pp. 267~278.
- ⑮ Ronen, (A.) 1965, *Observations sur l'Aurignacien. L'Anthropologie*, T. 69, Paris, pp. 475~481.
- ⑯ *ib.*, p. 476, fig.1.
- ⑰ Boulon, (M.) 1911, *op. cit.*, p. 268.
Burkitt, (M.C.) 1949, *op. cit.*, p.61.
- ⑱ Ronen, (A.) 1965, *op. cit.*, p. 479.
- ⑲ Noone, (H.) 1934, *Burins—Un nouvel essai de leur classification. Congrès préhistorique de France*, pp. 478~488.
- ⑳ Narr, (K.J.) 1955, *Das Rheinische Jungpaläolithikum. Rheinisches Landesmuseum Bonn und Verein von Altertumsfreunden im Rheinlande. B. 4, Bonn, S. 56~63.*
- ㉑ *ib.*, S. 57-Abb. 1. S. 59-Abb. 2. S. 61-Abb. 3.
- ㉒ Bordes, (F.) 1947, *Étude comparative des différentes techniques de taille du silex et des roches dures. L'Anthropologie*, T. 51, pp. 10~12.
- ㉓ *ib.*, p. 11-fig. 6.
- ㉔ *bec-de-flûte* を直訳して用いた。
- ㉕ Leroi-Gourhan, (A.) 1968, *La Préhistoire (l'Histoire et problèmes—Nouvelle Clio 1)*. Paris, pp. 258~259.
- ㉖ 例えば, スミス, (P. E. L.) 1965, 西南ヨーロッパにおける旧石器時代研究の現状(杉原荘介編 日本の考古学—先土器時代). 河出書房, 398~421頁.
- ㉗ Bordes, (F.) 1950, *Principe d'une méthode d'étude des techniques de débitage et de la typologie du Paléolithique ancien et moyen. L'Anthropologie*, T. 54, pp. 19~34.
Bordes, (F.) et Bourgon, (M.) 1951, *Le complexe Moustérien: Moustériens, Levalloisien et Tayacien. L'Anthropologie*, T. 55, pp. 1~23.
- ㉘ Sonnevile-Bordes, (D.de) 1954, *Esquisse d'une évolution typologique du Paléolithique supérieur en Périgord (Défense et illustration de la Méthode statistique). L'Anthropologie*,

T. 58, pp. 197~230.

- ㉘ 「截頂石刃」という訳語を借用。芹沢長介 1971, 前掲書, 163頁。
- ㉙ Sonneville-Bordes, (D. de) et Perrot, (J.) 1955, *Lexique typologique du Paléolithique supérieur. Outillage lithique-III, Outils composites-Percoirs. Bulletin de la Société Préhistorique Française*, T. L II, pp. 76~99.
- Sonneville-Bordes, (D. de) et Perrot, (J.) 1956. *Lexique typologique du Paléolithique supérieur. Outillage lithique-IV, Burins. Bulletin de la Société Préhistorique Française*, T. L III, pp. 408~412.
- ㉚ Bordes, (F.) 1947, *op. cit.*, p. 10.
- ㉛ Leroi-Gourhan, (A.) 1968, *op. cit.*, p. 259.
- ㉜ Sonneville-Bordes, (D. de) 1954, *op. cit.*, p. 230.
- ㉝ Pradel, (L.) et (J. H.) 1966, La station Paléolithique du Raysse, commune de Brive (Corrèze). *L'Anthropologie*, T. 70, pp. 225~254.
- ㉞ *ib.*, p. 236~245, fig. 5, 6, 7.
- ㉟ 直線状の剥離稜とは、石刃技法による真正な石刃の剥離面に残されている両側に平行した *flaing ridges* を指す。
- ㊱ 石刃技法によって打剥される理想的な *true-blade* のこと。
- ㊲ 石刃製作の場合、真正な石刃と同時に打ち剥される剥離稜の屈曲した不整形な石刃、つまり *flake-blade* のこと。
- ㊳ 石刃製作のために材石を調整打剥する際に得られる不定形な剥片を指す。
- ㊴ Sonneville-Bordes, (D. de) et Perrot, (J.) 1956, *op. cit.*, p. 411, fig. 1-5.
- ㊵ 上端を打面として彫刻器面を並列させたこの種の平担彫刻器の場合、えてして二つの彫刻器面の間に残される剥離稜の上端は残存した打面とともに角張って尖出し、むしろ彫刻器の刃先としては邪魔物であるため、意識的に除去して刃先の稜線を整えることを意味する。
- ㊶ Pradel のいう *Burin d'angle et plan* の訳語として「角形平担彫刻器」を用いた。Pradel, (L.) et (J. H.) 1966, *op. cit.*, p. 238.
- ㊷ Sonneville-Bordes, (D. de) 1954, *op. cit.*, p. 199.
- ㊸ Pradel, (L.) et (J. H.) 1966, *op. cit.*, p. 236.
- ㊹ Pradel, (L.) 1965, L'abri Aurignacien et Périgordien des Roches, commune de Pouligny-Saint-Pierre (Indre). *L'Anthropologie*, T. 69, p. 224, fig. 4-13, 14.
- ㊺ Perpère, (M.) 1972, Remarques sur l'Aurignacien en Poitou-Charentes. *L'Anthropologie*, T. 76, pp. 399~400.
- ㊻ Joannès, (P.) et Cordier, (G.) 1958, La station Magdalénienne du Bois d'Après, commune d'Yzeures sur Creuse (Indre et Loire). *Bulletin de la Société Préhistorique Française*, T. LV, p. 739, fig. 3-42.
- ㊼ Bouyssonie, (C. J.) 1948, Un gisement Aurignacien et Périgordien, les Vachons (Charente). *L'Anthropologie*, T. 52, p. 29, fig. 10-6.
- ㊽ Sonneville-Bordes, (D. de) 1960, Le Paléolithique supérieur en Périgord. T. 1, Bordeaux, p. 197, fig. 119-10.
- ㊾ Pradel, (L.) et (J. H.) 1966, *op. cit.*, p. 244, fig. 8-17.
- ㊿ Sonneville-Bordes, (D. de) 1960, *op. cit.*, p. 186, fig. 112-15.
- ㊱ Sonneville-Bordes, (D. de) et Perrot, (J.) 1955, *op. cit.*, p. 77, fig. 1-13.
- ㊲ Pradel, (L.) et (J. H.) 1966, *op. cit.*, p. 241, fig. 7-14. p. 240, fig. 6-3.
- ㊳ Bouyssonie, (C. J.) 1948, *op. cit.*, p. 37, fig. 14-3. p. 31, fig. 11-6.
- ㊴ Pradel, (L.) et (J. H.) 1966, *op. cit.*, p. 239, fig. 5-26.
- ㊵ Bouyssonie, (C. J.) 1948, *op. cit.*, p. 31, fig. 11-5.
- ㊶ Pradel, (L.) 1957, Le Solutréen de Badegoule-Documentation complémentaire. *Bulletin de la Société Préhistorique Française*, T. LIV, p. 605, fig. 3-2.

- ⑤⑧ Joannés, (P.) et Cordier, (G.) 1957, La station proto-Magdalénienne de la Pluche. *Bulletin de la Société Préhistorique Française*, T. LV, p. 90, fig. 6-30.
- ⑤⑨ Pradel のいゝ Bulin à double plan の訳語として「両面平坦彫刻器」を用いた。Pradel, (L.) et (J.H.) 1966, *op. cit.*, p. 242.
- ⑥⑩ Joannés, (P.) et Cordier, (G.) 1958, *op. cit.*, p. 741, fig. 4-66.
- ⑥⑪ Pradel, (L.) et (J.H.) 1966, *op. cit.*, p. 240, fig. 6-7.
- ⑥⑫ Couchard, (J.) et Sonnevill-Bordes, (D.de) 1960, La grotte de Bassaler-Nord, près de Brive, et la question du Périgordien II en Corrèze. *L'Anthropologie*, T. 64, p. 424, fig. 5-9.
- ⑥⑬ Darasse, (P.) et Guffroy, (S.) 1960, Le Magdalénien supérieur de l'abri de Fontalès près Saint-Antonin (Tarn et Garonne). *L'Anthropologie*, T. 64, p. 9, fig. 4-20.
- ⑥⑭ Sonnevill-Bordes, (D.de) 1960, *op. cit.*, p. 186, fig. 112-11.
- ⑥⑮ Bouyssonie, (J.) 1948, *op. cit.*, p. 18, fig. 6-5.
- ⑥⑯ Pradel のいゝ Burin-ciseaux の訳語。Pradel, (L.) et (J.H.) 1966, *op. cit.*, p. 241.
- ⑥⑰ *ib.*, p. 241, fig. 7-8.
- ⑥⑱ Sonnevill-Bordes, (D.de) 1960, *op. cit.*, p. 222, fig. 130-5.
- ⑥⑲ Joannés, (P.) et Cordier, (G.) 1958, *op. cit.*, p. 741, fig. 4-60.
- ⑦⑩ Larue, (M.) Combier, (J.) et Roche, (J.) 1955, Les gisements Périgordien et Magdalénien du Saut-du-Perron (Loire). *L'Anthropologie*, T. 59, p. 419, fig. 10-17.
- ⑦⑪ Joannés, (P.) et Cordier, (G.) 1958, *op. cit.*, p. 739, fig. 3-39.
- ⑦⑫ Movius, JR. (H.L.) and Judson, (S.) 1956, The rock-shelter of la Colombière. Cambridge, p. 109, fig. 30-154.
- ⑦⑬ Pradel, (L.) et (J.H.) 1966, *op. cit.*, p. 241, fig. 7-12.
- ⑦⑭ Movius, JR. (H.L.) and Judson, (S.) 1956, *op. cit.*, p. 111, fig. 31-170.